研究課題　藤波家旧蔵史料の調査・研究

研究経費　七二万六〇八〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　高橋秀樹（國學院大學・教授）

　所内共同研究者　尾上陽介・遠藤珠紀

　所外共同研究者　田中大喜（国立歴史民俗博物館・准教授）・比企貴之（國學院大學・兼任講師）

研究の概要

（１）課題の概要

　神宮祭主であった藤波家の旧蔵史料は、宮内庁書陵部や國學院大學の史料群が知られているが、史料編纂所にも「藤波家蔵書」の蔵書印をもつ近世写本が所蔵されているほか、各地の所蔵機関に旧蔵の文書や書籍が所蔵されている。また、国立歴史民俗博物館の「広橋家旧蔵記録文書典籍類」が明治時代末～大正時代には藤波家に所蔵されていたことも知られており、その時期に複数回作成された蔵書目録が史料編纂所・東洋文庫、國學院大學に現蔵されている。  
昨年度は、各所蔵機関の蔵書目録等から判明する藤波家旧蔵史料をデータ化し、京都学・歴彩館、徳島大学等の現蔵史料を調査した。そこで本年度は、①未調査分の史料調査を行い、データの充実を図る。②昨年度画像データを取得した複数の蔵書目録の分析を行って、目録間の異同と、現存する旧蔵書との関係を明らかにし、複数の所蔵機関にまたがる公家文庫を総合的に研究するための基礎を築く。③奥書等の分析から祭主家がどのように公家日記を集積したのか、またどのような経緯を経て蔵書が散逸していったのかを関係史料から追究する。

（２）研究の成果

　今年度の研究成果は、二〇二一年三月二七日にオンライン研究集会「藤波家旧蔵史料調査の成果と課題」を開催して報告した。以下はその成果概要である。  
追加調査によって、ノートルダム清心女子大学には昨年度判明していた二点に加えて計五点の藤波家旧蔵本が存在することと、稲賀敬二氏が一点を所蔵されていたことが判明した。『弘文荘待價古書目』掲載本の追跡調査では、宮内庁書陵部・神宮文庫・京都文化博物館・東京大学史料編纂所・京都大学附属図書館・早稲田大学図書館・天理図書館に各一点現蔵されていることが明らかとなり、その調査過程で、神宮文庫にはほかにも藤波家旧蔵本が所蔵されていること、これまで千家達彦氏所蔵と報告されていたものが國學院大學所蔵分に含まれていることもわかった。これまでに明らかとなった旧蔵書の分析により、藤波家蔵書のおよその形成時期と流出・移動時期について仮説を立てることができた（高橋秀樹「藤波家旧蔵史料の現状と伝来」）。  
東京大学文学部宗教学研究室所蔵「正親町家旧蔵神道関係史料」は、近世の藤波家を知るための重要史料であり、藤波家が伝えた中世祈祷命令文書は、祭主岩出家としての家の歴史を示すアイデンティティーであった（比企貴之「近世の祭主藤波家と伊勢神宮」）。  
国立歴史民俗博物館所蔵「広橋家記録文書典籍類」の表紙・押紙に付された記号、本紙の丁付けと、東京大学史料編纂所架蔵『藤波家蔵文書記録目録』の記載から、大正時代に岩崎家によって継ぎ合わせを含む大規模の改装が施される前（広橋家・藤波家旧蔵時代）の史料の在り方が復元できることがわかった（田中大喜「「広橋家旧蔵記録文書典籍類」所収文書群の書誌学的考察」、尾上陽介「東京大学史料編纂所所蔵『藤波家蔵文書記録目録』に見える『民経記』原本の構成」）。  
藤波家への移動以前にも、広橋家文書には何回もの危機があり、それを乗り越えて蔵書が伝えられたこと、その間に他家の文書の流入もあったことがあきらかとなった（遠藤珠紀「広橋家文書の伝来寸描」）。  
研究テーマを異にする研究者が共同研究を行ったことで、それぞれの専門分野では常識でありながら、他の分野の研究者には共有されていなかったことが明らかとなり、有意義な情報交換ができた。しかし、コロナ禍によって、対話の機会が限られたこと、出張をともなう原本調査が今年度も行えなかったことが悔やまれる。